

キュウリ養液栽培による早進化多収生産技術の確立 ～ハイワイヤー栽培の検討～

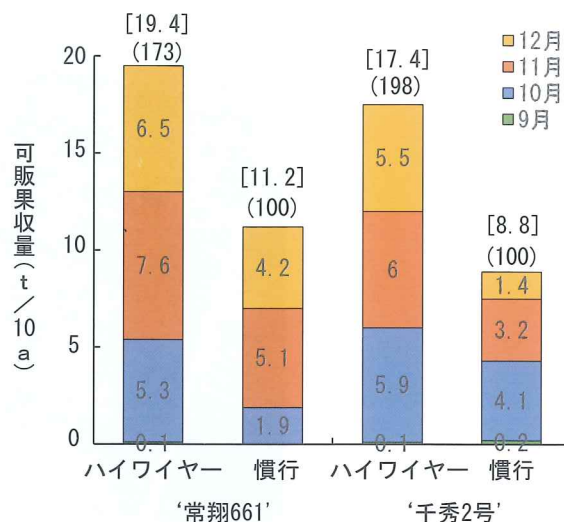
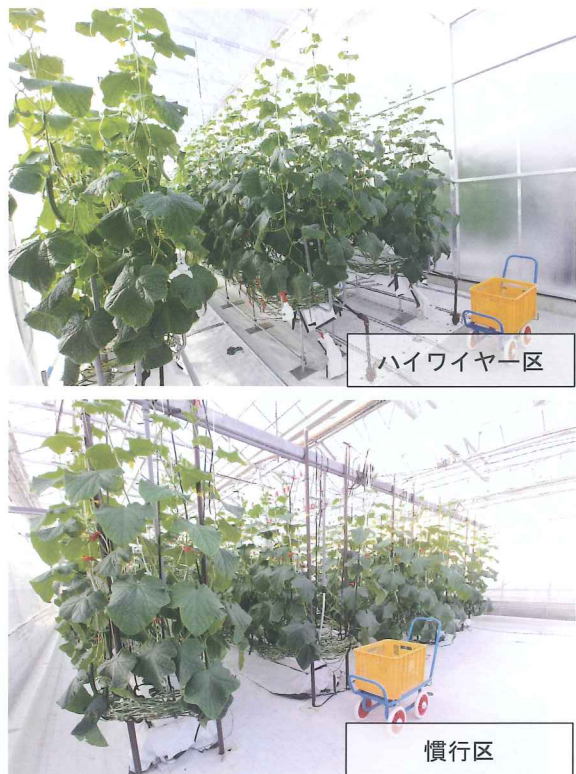


図1 誘引方法の違いが養液栽培における
キュウリの収量に及ぼす影響 (2019)

注 1) 調査は各区主茎8本、誘引枝8本
2) 可販果収量はJA高知県出荷規格のA品とB品の合計
3) []内の数字は合計、()は慣行を100とした比

高知県の主要品目であるハウスキュウリでは、炭酸ガス施用をはじめとする環境制御技術が普及し、著しい増収効果が得られています。当センターでは、さらなる増収技術の開発と、整枝・誘引方法や収穫作業等の省力化技術の開発を目指した新たな取り組みとして、本年度より養液栽培において定植時期の早進化と長期栽培、生体情報に基づいた環境制御方法、高軒高ハウスにおけるハイワイヤー栽培等の検討を始めています。

今回は軒高6mの高軒高ハウスにおけるハイワイヤー栽培の途中経過を紹介します。品種は‘常翔661’、‘千秀2号’を用い、9月5日に定植しました。誘引線の高さを、ハイワイヤー区は380cm、慣行区は210cmとし、生育に応じてつる下ろしを行いました。ハイワイヤー区では慣行区と比べいずれの品種でも雌花数

が多く、流れ果率が低く(データ省略)、収量性が著しく高くなることが明らかとなりました。12月末までの可販果収量は‘常翔661’で、73%増の19.4t/10a、‘千秀2号’で、98%増の17.4t/10aとなりました(図1)。また、ハイワイヤー栽培は作業姿勢が非常に楽で、つる下ろしの回数も少なくすることができ、管理作業の負担が大きく軽減されました。

栽培は6月末まで続け、長期栽培を検討する一方、2月上旬に植え替える年2回作も検討する計画です。その他、より定植時期を早めた8月定植の検討、タイムラプスカメラによる生体情報の簡易な取得方法なども検討しています。今後も研究成果を順次報告させていただきます。

(先端生産システム第二担当 下藤優子
088-863-4918)